

26 高次脳機能障害を有する脳血管疾患患者とその家族の健康管理行動の現状に関する調査～在宅における血圧管理に焦点を当てて～

病院 看護部 4階東病棟 比護慧美、武田朋、山崎咲子

【緒言】高次脳機能障害患者の在宅での再発予防のための健康管理について不明のことが多く、血圧に焦点をあてて患者と家族から聞き取りを行い退院指導に反映するための示唆を得たいと考えた。【目的】脳血管疾患により高次脳機能障害となった日常生活動作が自立している患者とその家族を対象に、在宅での血圧に焦点をあてた健康管理の現状を明らかにする。【方法】入院中に健康管理指導を受け、血圧自己測定や再発予防のための自覚症状のチェックを実施し自宅退院した失語のないHDS-R 20点以上かつFIM評価の認知項目5点程度の患者5名とその家族3名を対象とした。患者・家族へ電話でインタビューガイドを用いた半構造化面接を行った。分析は、「血圧に焦点をあてた健康管理の工夫と困難」という視点に基づき逐語録よりコードを抽出し、サブカテゴリー、カテゴリーを形成した。大学の看護研究指導者からスーパーバイズを受け妥当性を確認した。研究目的と内容、研究協力・同意撤回の自由、匿名性保護について書面と口頭で説明し同意書をもって同意を得た。電話でのインタビュー開始前に口頭で再度説明した。データは鍵のかかる保管庫に保管した。本研究はA病院の倫理委員会の承認を得た。（承認番号2022-097）【結果】患者は「健康管理を継続するための工夫」をし「自己に応じた健康管理行動」を行っていた。入院中からの習慣や慣れている方法で記録する等「高次脳機能障害に応じた代償手段」を活用し、健康管理を継続していた。健康面に関し協力を得るため「他者との関わりを健康管理行動に活用」していた。健康管理について「困り事のない生活」と話す一方、「日常生活での困りごと」として他者に理解してもらえない思いがあった。家族は障害の特性を踏まえ関わりの工夫や本人への声掛け等「健康管理行動のサポート」や「現状の把握と見守り」をしていた。【考察】入院中の健康管理行動や、代償手段を習慣化したことで退院後も困難を感じず継続出来ている。他者からの関心や協力に対する患者の思いが健康管理の継続に繋がっていると考ええる。その一方他者に理解してもらえない思いを抱えることで健康管理行動に影響が生じる可能性がある。家族に入院中の関わりや障害に合わせた支援方法を伝えることで、患者は家族の関わりに対し抵抗感を抱かず在宅に移行できる。家族の障害に対する理解が患者の自尊心を低下させることなく、自発的な健康管理行動に繋がると考える。【結論】患者は退院後も代償手段を活用し健康管理を行い、家族は過度な介入はせずサポートをしていた。入院中に健康管理行動の習慣化を図り退院後の生活を見据えた継続可能な健康管理行動の基盤をつくる必要があると示唆された。